

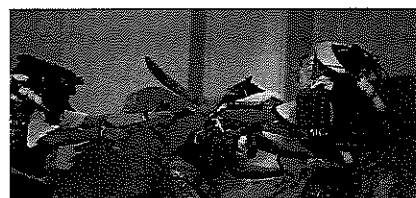
科学的根拠を活用した学校経営

—大船渡中方式カリキュラム・マネジメントを通して—

岩手県大船渡市立大船渡中学校 校長 佐藤 謙二

学校紹介

本校は全校生徒155名です。東日本大震災では学区が甚大な被害を受けました。かなり厳しい環境の中で生徒・保護者・地域の心の支えとなったのが郷土芸能伝承活動でした。4団体に全校生徒の8割の生徒が参加し、文化祭で発表します。30年続く活動で被災地の伝統文化の継承に励んでいます。



H29 文化祭 赤澤鎧剣舞

【問題と目的】

新学習指導要領において「カリキュラム・マネジメント」が提起されました。そのなかで児童生徒の実態把握のためのデータ活用と PDCA サイクルの実施が要請されています。このような中で河村(2017)は学校の PDCA サイクル実施上の課題として①第三者が納得する客観的な指標使用の少なさ②実態分析の甘さを指摘しています。そこで、本校はこの課題を克服すべく下記プログラムを策定し、H29年度から2年間試行的実践に取り組んできました。

大船渡中方式カリキュラム・マネジメント

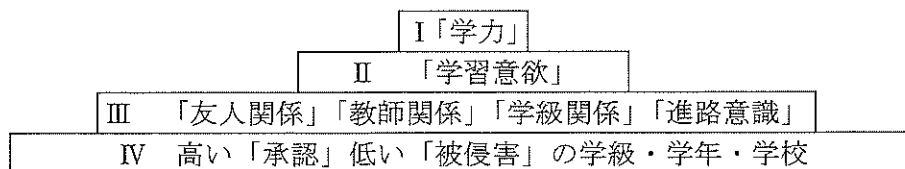
科学的根拠 標準化された尺度による実態把握と効果測定・実証性ある指導方法のエビデンス
R-PDCAサイクル PDCAの前段階に「調査」を導入(綿密な実態把握のため)
学校生活意欲を基盤とする学力向上 対人スキル等非認知能力→「学習意欲」→「学力」の流れ

対象	目的	方法
教師	■経営参画への意識・行動の改善	○全体構想図・共通実践内容の理解 ○エビデンスによる現在地・目的地の可視化 ○マッチングの視点での評価
生徒	■学級経営スキルの改善	○実証性ある研究実践
保護者	■学校生活意欲と学力の向上 ■学校への信頼感のさらなる醸成	○非認知スキル育成をもとに「学習意欲」の喚起 ○インフォームドコンセント・説明責任

【結果】

1 Researchの段階(調査)

(1) 調査① 構造図 前年度データから指導の関連性を容易に把握できるように、本校独自の構造図を作成しました(資料1)。尚、この図はマズローの欲求階層説を参考にしました。



資料1 学校生活意欲を基盤とした学力向上

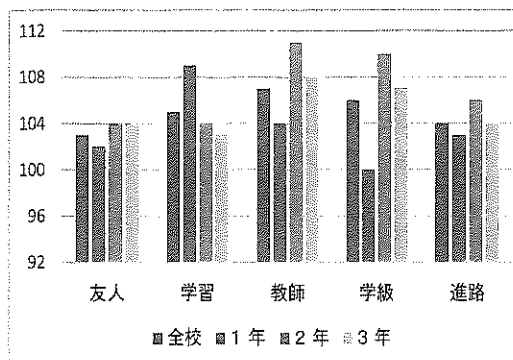
一番基礎となるのが、IVの認められいじめ被害感のない集団の存在です。IVが確立されて初めてIII II Iが成立します。仲の良い友人、信頼できる教師、自己存在感のある学級があり、「進路意識」が明確であると、「学習意欲」が高まります。そしてそれが学力向上につながります。この構造図をNRT、

hyperQ-U のデータで統計分析したところⅣ→Ⅲ→Ⅱ→Ⅰの方向に有意に高い影響度があることが確認され、科学的根拠を有し汎用性があることが判明しました（別紙資料1）。PTA 総会では校長がパワーポイントで構造図・前年度結果・今年度目標等について説明します（インフォームドコンセント、説明責任）。保護者からは「国の教育の新しい方向と学校の方針が理解できた」「大中が全国レベルでどれ位の位置にいるのかよく分かった」「ぜひ目標を達成してほしい」との声がありました。

（2）調査② 実態把握

hyperQ-U、NRT の標準化されたテストで個人・集団の実態を把握します（hyperQ-U 全学級年2回、NRT 全学年・全教科年1回）。前回との比較・全国平均との比較をグラフ化して強味と弱みを全員で共有します。資料2は今年6月のスクールモラルの実態です。5領域の大部分で全国平均の100を超過していて、生徒の学校適応は概ね良好です。特に本校の強みは生徒と教師の関係性の良さです。改善点は、「友人関係」

「進路意識」「学習意欲」です。1年生の対人関係のスキルの育成が課題です。



資料2 スクールモラルの実態 (2018/6)

昨年度12月から今年度6月までに同一母集団（現2，3年生）を対象に指導の効果検証をしたところ、「進路意識」で有意な向上が見られました（別紙資料2）。「進路意識」が高まれば、進路目標を達成しようとして「学習意欲」が向上し、その結果「学力」が伸びます（別紙資料1）。「学ぶことと自己の将来とのつながり」（学習指導要領 H29 年度告示）が重要視されていますので、今回の変容は意義があると考えます。

2 Planの段階（計画）目標設定

前回のデータをもとに学級・学年・学校の目標を幅をもって設定します。Ⅰ：NRT の偏差値 55 ⅡⅢ：全国平均を100として110 Ⅳ：hyperQ-U の満足群比率は65%（全国より+25%と高め）を年度の最終目標にします。目標を設定する上で重視している点は①測定可能性②達成可能性③期限設定性の3つです。6月と11月にチェックポイントがあり、実践への集中力が高まります。

3 Doの段階（実行）共通実践

多忙化防止と実践意欲の向上のために、共通実践の最低ラインを部下職員と契約しました。それ以上については学級担任の自由裁量で目標を達成するようにしました。Ⅰ～ⅣはPIの構造図参照。

（1）学級経営個別研究会（ⅡⅢⅣ） 校長・学年長・担任で行う経営戦略会議です。目的は適応改善と学力向上です。年回2回実施し hyperQ-U の資料を見ながらK13法という効果が証明された事例研究法で行います（1回90分）。学級集団の状態像や個人の適応状況について所定のワークシートを使い、アセスメントし対応策を話し合います。学級は7段階のうちどの段階にあり次回までにどこに到達させるか、また、観察で見逃していた生徒等の個人への対応を話し合います。メンバーは実証性のあるテキスト（河村、2012）を参考に議論します。校長は担任の「後ろから共に歩む立場」で共同経営者として助言しています。「学級経営の基本的な型を理解できた」「現在地（実態）がわかり、目的地（目標）まで今から何をすべきか分かった」と学級担任からの声がありました。学校全体で共通のものさしで学級や生徒のことを話し合えるようになったこと、本校の教員が学級集団の分析と対応ができるようになったことが大きな成果です。校長主管

(2) グループ・エンカウンター (ⅢⅣ) 学級担任が行う集団カウンセリングです。大運動会・文化祭後の年回2回1単位時間を使い全学級一斉に行います。級友の努力を「がんばりカード」に記述しカードを交換し合うものです。このねらいは自他理解、自己効力感・メタ認知の向上等です。生徒への効果では、自身の長所への気づきや学級の凝集性の高まりもありました(別紙資料「初心」)。尚、全国学調で「自分には良いところがある」の「1当てはまる」の数値は実践を始める前(H28年度)の15%から31%(H30年度)と倍増しています。生徒指導部主管

(3) 援助ニーズ把握シート(ⅡⅢⅣ) 生徒理解を目的に作成した本校のオリジナルです。各項目について、全国を母集団として色分けしています。(青:高位群、無色:中位群、赤:低位群 ○:高位群でも1標準偏差以上、▲:低位群でも1標準偏差以下)。赤の項目は要配慮です。このデータを教科担任・部活顧問はじめ全教師が共有します。教師からの感想として、「6月と11月のデータを比較できる様式なので、個人や学級の変化を視覚的に短時間でつかむことができる」「自分の観察と違う生徒に注意して対応するようになった」との声があります。生徒指導部主管

学 年	学 級	No.	性 別	名前	満足度 4群	友人 関係	学習 意欲	教師 関係	学級 関係	進路 意識	承認	侵害	配慮	関わり
					満足			○					35	31
					非承認		○				○			
					不満足									

資料4 援助ニーズ把握シート(例)

(4) 満足度4群への対応(Ⅳ) hyperQ-Uでは生徒を4つの群に分類します。本校ではこれを基に指導行動のアウトラインを策定し授業や諸活動で各群の特性に応じた対応をしています。学級内の多様性への配慮です。本校では4群のうち非承認群をターゲット群としています。手のかからず見逃される傾向が高いから、意図的に対応しようとするものです。生徒指導部主管

資料3 満足度4群への対応

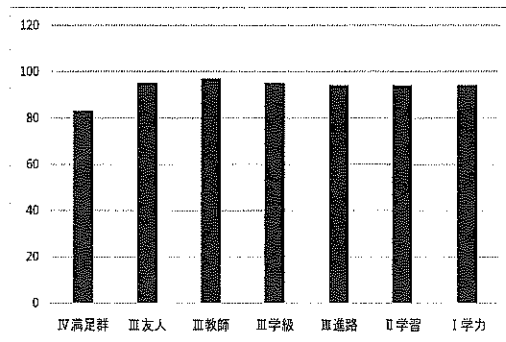
満足度4群	特 徴	対 応
満足群	・適応している子 ・能力のある子	○授業や諸活動で次の作業を明示する ○リーダーを固定しない(多くの子に役割)
侵害行為認知群	ア) 不安感が高い子	○場をとらえOKサインを与える ○行事の前に面談し心配事を把握し対応
非承認群	イ) 自己中心的な子 ・目立たない子	○ソーシャルスキル訓練を行う ○地道な努力を賞揚する ○ほめる場合は時と場に配慮する
不満足群	・不適応ぎみの子	<前回調査で侵害行為認知群・非承認群どの群にいたのか把握し、その群への対応を優先する>

(5) 授業見せ合い週間(ⅠⅡ) 年間6週互いに授業参観し合い指導力の向上を図っています。参加者は用紙に感想を書き、職員会議で内容を共有します。教科の壁を低くするために参観の視点を明確にしています。年度前半は課題解決型学習の視点が中心でしたが、今後①有意味学習(既習・既有知識との関連化)②自律性支援学習(教え込みでなく、自力解決のヒントを与える等)も重視していきます。「主体的、対話的で深い学び」の実現に不可欠だからです。尚、本校では教師が互いに授業参観することが生徒にも共通認識となっています。研究部主管

4 Checkの段階（評価）

7月と12月に前回との比較（有意差検定）目標達成率や全国比較を行います。また、次の指導に生かせるように「この群の生徒には効果があったが、こちらの群には今一步だった」のようにマッチングの視点で評価するようにしています。できないことを教師の能力に帰属させるのではなく、生徒の実態と指導方法のミスマッチに求め、実践意欲の維持向上のためです。

資料5は6月データを使つての中間評価です。目標値（P2参照）に対しての達成率を示しています。この中間評価は達成度をつかみ軌道修正するために行います。



資料5 目標への中間達成率（全校）

5 Actionの段階（改善）

指導して「うまくいったことは継続する」「うまくいかない点は別な方法を試みる」ようにしています。また、生徒から学び指導に活かすことも重視しています。例えば学力を伸ばした生徒に「やる気スイッチ」「得点につながった学習方法」を質問して広めています。さらに上記中間評価を受けて、満足群比率の向上に焦点化しています。ターゲット群を定めて、対応策を考え実行に移しています。

【考察】

（成果）第一は教師の参画意識と参画行動の高まりです。1学年団は主体的に学級ソーシャルスキル（CSS）を年間6回行うプログラムを開始し、予防的開発的実践に取り組んでいます。これもR-PDCAサイクルのR（調査）によって対人関係の課題が明確化されたことによるものです。

第二は生徒の好ましい変容です。「進路意識」の有意な向上、スクール・モラル5領域全国平均超過、そして、全国学調での自己肯定感の改善です。学力について全国平均以上を確保していますが、目標のレベルの達成に向けてさらなる取組が必要と考えております。

第三は保護者との信頼関係です。この2年間PTA総会で生徒の学校適応・学力の実態をありのまま伝え説明責任を果たしてきました。「学校は保護者に開かれています」というメッセージを送り続けたことは、信頼感の醸成につながっていると思います。

（課題）第一は学校評価との整合性を図るということです。学校評価項目と本実践の重複がありますので、本実践をベースにして学校評価項目の見直しをしていきたいです。

第二は学級の状態像の差です。学級により学校生活適応の指標にばらつきが見られます。この原因として取組の格差があると考えられます。一律の共通実践内容の弾力化を図り、必要な教師に必要なサポートができる体制を構築していく予定です。

【結びに】

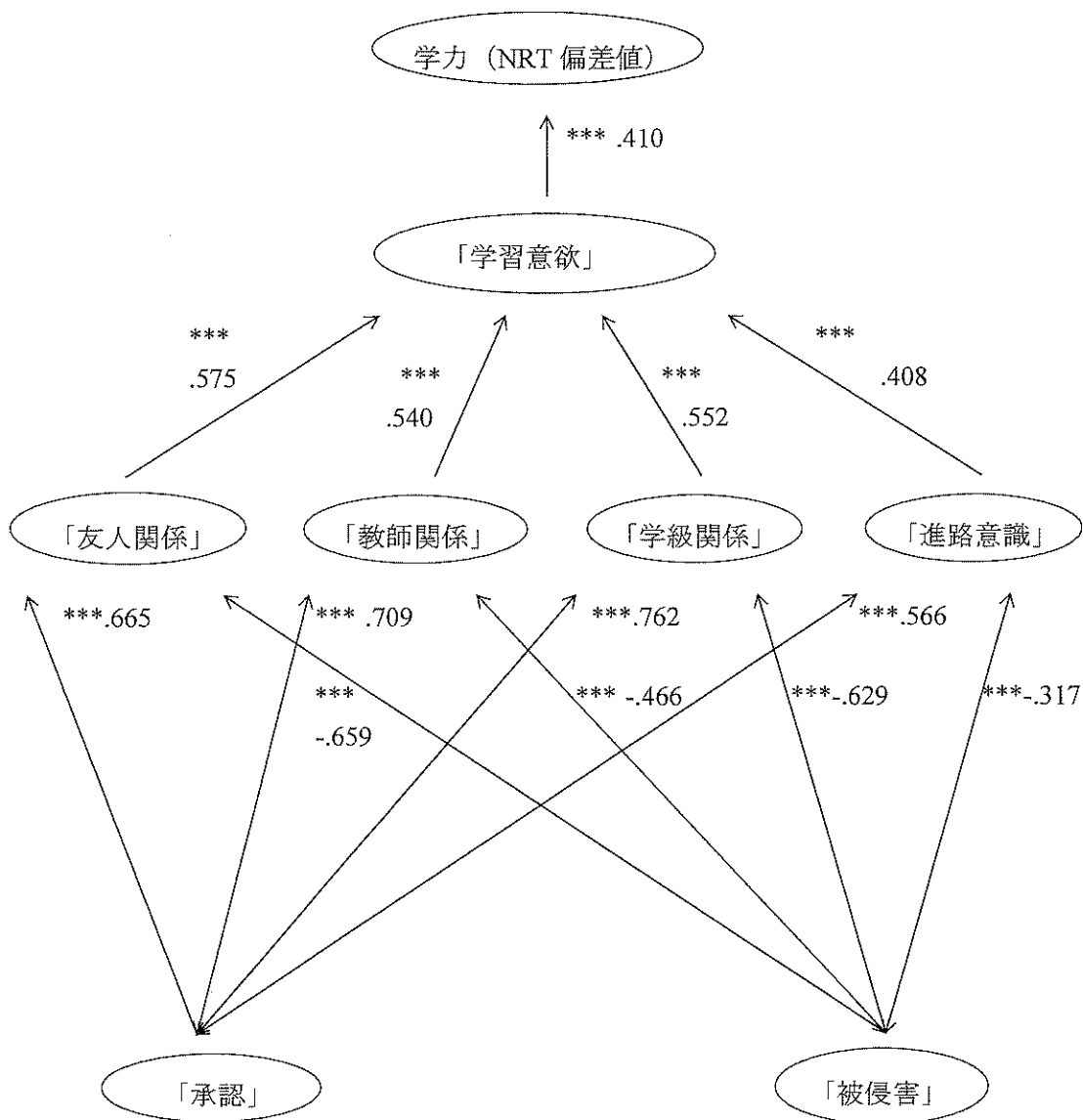
ジョン・ハッティはその著『教育の効果』で全世界8800万人を対象として、学力に影響を与える要因を分析しました。高い成果を出す学校の要因では①高い数値目標の設定②データ分析による学力の詳細な把握③エビデンスある指導の共通実践を挙げています。この例から課題はありますが、本校も正しい軌道を進んできたのではないかと思います。今後も学校全体で一つ上の段階を目指していくつもりです。「教師の自己効力感は児童生徒に転移し正のスパイラルを生む」からです。

【参考文献】

- | | | | |
|--------------------|------|--------|------|
| 『学級集団づくりのゼロ段階』 | 河村茂雄 | 図書文化社 | 2012 |
| 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 | 奈須正裕 | 東洋館出版社 | 2017 |
| 『学校管理職が進める教員組織づくり』 | 河村茂雄 | 図書文化社 | 2017 |

別紙資料1 学力に影響を及ぼす要因の回帰分析結果

***:p<.001 数値は標準回帰係数



別紙資料2 2, 3年のスクール・モラル平均得点の推移

	2017/11月	2018/6月	有意差
友人関係	18.2 (1.9)	17.9 (2.1)	n.s.
学習意欲	15.8 (2.3)	15.4 (3.1)	n.s.
教師関係	15.2 (3.9)	15.2 (3.6)	n.s.
学級関係	16.8 (2.5)	16.7 (3.2)	n.s.
進路意識	14.1 (3.9)	15.3 (3.7)	*

() 内は標準偏差

* : p<.05

n.s.:有意差なし

初心

校訓「明るく 賢く 逞しく」

平成30年5月24日(木) No.7 文責 校長

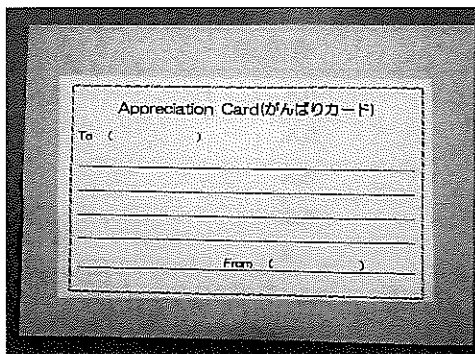
**「がんばりカード」で自分・級友の新発見**

大運動会の反省について昨年までは自分で自分のことを作文で振り返るやり方でした。しかし、今年度は互いに頑張ったことをカードに書き合って交換し、もらったカードを読み感想を書くという方式にしました。これはグループ・エンカウンターという集団カウンセリングの一つです。この手法の良いところは①自分や級友への気づきが生まれる②自分を肯定的にみるようになる③今後の生活意欲が高まる④学級等の団結が深まるところです。

5月22日(火)に全校一斉で取り組みました。以下に生徒の感想を掲載します。

- やはり人から認められ、ほめられるのはうれしかったです。このカードを書くには周りの人をよく見ていないと書けないので、これからは周囲を見ていきたいです。
- 改めて振り返ってみて、班員の人や係の人の良いところを思い出せて良かったです。カードには運動会のことだけでなくふだんのことでも書いてあり、自分に自信が少しいて、うれしかったです。
- カードを読んで、自分でも気づいていないことを、友達を書いて教えてくれるととてもうれしいことがわかりました。また、友達を見ていていいなと思ったところや見習いたいことをカードに書いて伝えられることがとてもいいと思いました。
- 自分ががんばったところをみんな見てくれているんだと思いました。他の人ががんばっている姿を見て自分もがんばろうと思いました。みんながいいところを教えてくれてうれしいし、これからはがんばろうという気持ちになるのでいいです。
- あまり見られていない所を気づいて認めてもらえてうれしかったです。
- 一人一人書いている内容が違って、驚きました。色々な見方があることがわかりました。
- 「がんばりカード」は自分のためになると思うので、記念に残したいと思います。
- 努力はちゃんと周囲に伝わる。努力はむだではなかったと思った。
- 普段このような会話をすることがなかったので、相手がどのようなことを思っているのか知る良い機会になりました。
- 自分の成果・長所だけでなく、クラスの良さにも気づいた。今以上にクラスの絆を深めていきたい。

生徒全員の感想を読みました。大運動会について2度目の感動を味わいました。秋の文化祭の後にも全校一斉で行います。生徒の皆さんお楽しみに！



Appreciation Card がんばりカード

- ◆班の人には互いに全員が書いて交換します
- ◆班員以外からもらったら、返事を書きます
- ◆各内容は詳しく、字数はカードにぎっしり最後までです。